

はじめに

倫理はどんなふうにして考えたらいいのだろうか？ 一見、単純そうな疑問だ。もちろん、深く、明晰に、正確に、そして正しく——ということが倫理で可能だと——考えなければならぬ。しかし、どこから手を着けたらいいのだろうか？

ひとつのやり方として、一般理論を構築するという道があるだろう。倫理の本質を確定し、倫理用語の意味を定義し、道徳の基本原理を定式化し、優先順位をつけてそれを整理するのである。倫理へのこうしたアプローチは、要するに、思いつくかぎりの理論的問題に片っ端から答える理論を作ろうというものだ。

理論ができあがったら、当然、他の一般理論よりもそれが優れていることを示さなければならぬ。また、必ず寄せられるであろう異論にも答えなくてはならない。理論を立てて批判の矛先から守ったつぎは、現実の倫理問題に応用する番である。理論が論争をどう解決するかを示し、具体的な場面で何をすべきか答えてみせるのだ。

けれども、この種のアプローチにはいろいろと問題がある。道徳哲学には二千年以上の歴史があるが、倫理の基本性質も、道徳原理の優先順位も、実生活への応用の仕方も、いまだほとんど合意が得られてはいない。もっと悪いことに、一流の思想家のなかには、そんな合意など初めから無理だという意見さえある。

もちろん、いまこうしているあいだにも、深刻としか言いようのない倫理的葛藤を引きずりながら、世の中は動いている。今はむしろ、倫理について、空理空論を排して考えることが、今までにないほど

求められているのだ。たしかに道徳哲学には限界がある。だが、理をつくして倫理を考える作業は、合意が達成されるまで棚上げにするわけにいかないし、放棄することも許されない。「世に善も悪もなし」と説く没道徳主義者ですら、自分が何を否定しようとしているのかを明確にする必要がある。

倫理問題について、理論的合意がこれまで得られなかったからといって、合意が不可能だということにはならない。しかし、これとはべつの方法、やり方で、倫理を考えることもできるかもしれない。明快で切れ味鋭い一般理論によらずに、現実世界の道徳論争に知性の力を注ぎ込む道があるかもしれない。それは、考えうるかぎりのあらゆる倫理問題に答えてくれる、完成されたひとつの倫理学理論を確立し、対立学説を手当たりしだいに否定するというやり方とは違う。そうしたアプローチの代わりに（それと平行してでもかまわないが）、道徳哲学の研究者がこれまで作り上げてきたさまざまな倫理学説や概念、原理、批判を自在に使いこなせるようになることを目指すのである。あるいは、少なくとも、そういうものの用途に馴染んでおこうというわけだ。本書は、倫理を研究し省察する者がそれを成し遂げる一助となることを願って書かれた。各種の倫理学説から知恵を抽出して並べることで、学説の対立のなかで見失いがちな倫理学の拠所かんところが読者に伝わってくれば、幸いである。

「倫理学説」という大まかな枠のもとに収集した概念や思想の多くが、時として思いがけない射程で応用できることを、著者たちは示そうと思う。現代の倫理的言説は、さまざまな声で織りなされており、それぞれが取り組む問題も違えば、取り組む方法も違う。一つひとつの声に耳を傾け、正しく応答するには、多くの道具が必要である。ひとつの声、ひとつの道具では間に合わないのだ。

実際、今日の主な倫理問題について考え、人と意見を交そうと思えば、磨き上げられた一つの理論ではなく、二五〇〇年にわたる道徳哲学の豊かで多様な研究を利用せざるをえない。頭を鋭く働かせるには、中味のつまった「道具箱」が手許になくならない。慎重に、精確に、精緻に、倫理を考え抜く

ための、知の道具類を納めた箱が。

このような概説書を上梓するにあたって、著者たちが希望することがもうひとつある。多様な思想や方法がある程度深く細部にいたるまで読者に理解してもらおうのは、倫理の問題について、ただ考えるだけでなく、もっと実のある行動をとってほしいと願うからなのだ。人間が直面する問題の多くは、いくぶんかは、概念の問題であり哲学の問題である。そうした問題に向き合うには、もっと頭を働かせる必要がある。たしかに、この世界をより良きものにするには、薬や機械の力が欠かせない。その点で哲学はよく無用の長物という批判をうけるが、しかし、クリアに考え、道徳について健全に思量する能力もやはり求められるはずだ。古代ギリシア人の言う「理論知」と「実践知」はつながっているというのが、著者たちの立場である。

本書を支えるのは、多元主義、それも臆面もない多元主義の倫理学観である。たとえば功利主義の洞察は、功利主義者だけでなく、倫理について考えようとするすべての人にとって興味深いものであり価値がある、と信じるからだ。とはいえ、本書で取り上げたツールは、どんな場合にも闇雲に取り出して使えると言いたいわけではない。場面ごとに、より相応しいツールというものはある。もっとも、ツールの使い方がひとつしかないとか、ひとつの使い方しかしてはいけないという話ではない。同じ作業でも、ねじ回しを使ったほうが効率的だという人もいれば、トンカチのほうがやりやすいという人もいる。上級者は、初心者にはできない使い方をすることも可能かもしれない。倫理について考えるといっても、その能力が一人ひとり違う以上、ツールごとの使用頻度も各人で違ってくる。人によっては、めったに使わないツールもあるだろう。

本書の使い方も、やはりひとつではない。倫理学の授業では、通読してもらってもいい。第一章は、倫理学のよって立つ根拠を問題として取り上げた。つづく第二章では、倫理を考えるために作られたも

っとも重要な枠組みを検討した。第三章では、倫理の言説に登場する重要概念を紹介した。第四章では、倫理学説や倫理的判断を批判する方法を見た。最後の第五章では、倫理についての議論を極端にまで推し進めるとどうなるかを検討した。

けれども、このようにまっすぐ読み進めていくだけが、本書の読み方ではない。具体的な問題を理解する一助として、目次や索引を調べながら、本書をレファレンスとして使うこともできる。あちこちページを繰りながら、無数ともいえる方面に黙想の歩みを進めるのもいい。各項目の終りには、材料を補充しさらに考察を進めてもらうために、参照項目を付した。これによって読者は、概念どうしの関連や対照を——時には意外なかたちで——理解してもらえはるはずだ。

また、各項目には、若干の読書案内も載せておいた。当該項目のテーマについてさらに詳しい情報を与えてくれる本が主だが、なかには、その項目に登場した具体的事例についての研究情報も含まれている。また、多くの抽象概念に対してその具体例を盛り込むとともに、テキストの素材を、倫理をめぐる実際の論争にどう当てはめたらいいのかも示すよう努めた。索引には、そうした事例のトピックも含められている。

使い方はどうあれ、読者が繰り返しこの本をひもといてくだされば幸いである。それが、学生であれ、教師であれ、研究者であれ、専門職にある人であれ、倫理について、どうしたらもっとうまく考えられるかを知りたいという人であれ。

ジュリアン・バッジーニ
ピーター・フォスル

謝辞

以下の人々に感謝を捧げたい。辛抱強く支えてくれたピーターの妻キャサリン・フォスルと子供たち、イライジャ・フォスル、アイザック・フォスル・ヴァンIIワイク。内容面で助言してくれたエイヴリー・コーラーズ。意見を寄せてくれたジャック・ファートロングとエレン・コックス。校正を担当してくれたマギー・バー。そして、ピーターの海外渡航を支援してくれたトランシルバニア大学のジョーンズ奨学プログラムに。

我慢強いサポートを頂戴したブラックウエル出版のジェフ・ディーンとダニエル・デコトー。綿密で有益な、心のこもったコメントとともに、著者を励ましてくれた匿名のレフェリー氏。見事な手際で草稿を整理してくれた、ランニング・ヘッド社のシャーロット・デイヴィース、アニー・ジャクソン、デイヴィッド・ウィリアムズにもお礼を言いたい。そして、インターネットを構築し、保守してくれたすべての人々にも。それがなければ、著者たちの共同作業も友情もけっして生まれることはなかった。